
■ 4-1 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

● 共同研究の活動概要

研究代表者 高城 玲

本共同研究が対象とする映像資料「アチックフィルム・写真」とは、渋沢敬三を中心とするアチックミュージアム同人が、主に昭和初期、1930年代を中心とする調査旅行などの際に撮影した動画フィルムと写真を指す。神奈川大学日本常民文化研究所（以下常民研）には、動画フィルムが47巻、写真が9,000点弱所蔵されている。それらは昭和初期にかけての日本各地の景観とそこに住まう人々の生活、民俗、芸能や当時使用されていた民具などのモノを具体的な映像として記録にとどめている。また、中には当時日本の統治下にあった台湾や朝鮮、満州などの映像も含まれており、非常に貴重な資料である。

今回2009年度から国際常民文化研究機構（以下機構）が、常民研を母体として新たに発足したことを受け、本共同研究班では、この映像資料を主な研究対象とする「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を推進してきた。

本研究では当初から主に2つの課題を念頭に置いている。第1は、機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携し、映像資料の文化資源化の可能性を探るという課題であり、第2は研究目的として主に（1）モノという物質文化の問題、（2）モノと人との関係性の問題、（3）異文化（自文化）表象の問題等を検討するという課題である。

上記第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する研究に着手するにあたって、まずは前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が欠かせない。これまで、アチックフィルム・写真の価値が認められながらも、膨大な数にのぼる戦前の資料であることもあって、いまだ資料整理の途上にあり、特に動画フィルムに関してはいくつかの例外を除いて研究対象として正面から取りあげられることは多くなかった。

そのため本共同研究では、まずは映像資料の整理という作業に重点を置くこととした。この作業は、機構全体の所蔵資料の情報共有化事業と連携を取りながら進め、特に写真に関しては、全体での作業を担った小林光一郎と羽毛田智幸を中心に、粗目録から仮目録、本目録へと段階を踏んだ目録化が進められてきた。こうした機構全体における映像資料の整理状況の中で、地域を限定した上で、映像資料を核にした多岐にわたる情報を統合的に整理するという文化資源化の可能性を検討した。

ここで言う多岐にわたる情報とは、（1）動画フィルムと写真の映像資料を出発点として、（2）映像に関する目録、（3）現在残されている収集品、（4）当時の調査団が残した文献資料、（5）上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報などを含み、それらを統合化して整理しようとしたのである。これらの情報はより「厚い記述」のデータとして、今後の研究を支える柱となることが期待されるものである。

上記（3）から（5）に関しては簡単な説明が必要であろう。まず、（3）現在残されている収集品とは、主に国立民族学博物館に所蔵されている当時のアチック調査団による収集品（モノ）である。映像に記録されているモノと現在残されているモノの対応関係を調査し、情報整理データの一部に組み込むこととした。

また、（4）当時の調査団が残した文献資料とは、当時の調査団員らがその後活字にした文献資

料や調査当時にまとめたと思われる『十島雑綴』などである。こうした文献資料も統合的なデータ整理に組み込んで資料化することとした。

最後の(5)上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報とは、戦前に撮影された映像の上映会を現地で開催し、集まってくれた住民から新たに提供してもらう独自の関連情報である。

今回の共同研究では、こうした多岐にわたる情報の統合化を目指してきたが、時間的にも映像に記録されている全ての地域を網羅する余裕がない。そこで、膨大な資料に対して、時間的・人的な制約があることを考慮し、当初からいくつかの方針を定めて研究に取り組むこととした。その方針とは、第1にいくつかの撮影地に対象を限定して資料整理、研究を進めること、第2に1930年代に撮影された映像の当時を知る人が少なくなっている現状を考慮して、現地での上映会を開催し、現地の人々から映像資料に関する情報を収集すること、第3に出来る限り共同研究班全体で共同の現地上映会と調査を行うこと、第4に上述したように機構全体の所蔵資料の情報共有化事業と連携を取りながら進めることの4点である。

まず映像資料の中でも注目したのは、1934(昭和9)年5月にアチック調査団が行った「薩南十島調査」(現在の鹿児島県十島村)の口之島と中之島地域の映像である。この地域の映像資料にまずは整理と調査を限定することで、今後に向けてのパイロットケースにすることとした。当時の「薩南十島調査」は、短期間に各島をめぐるという駆け足の調査ながら、民俗学・民族学、宗教学、地理学、農学、生物学、人類学、岩石学などの各専門家を含む総勢20名以上の大規模で画期的な合同調査であった。数あるアチックフィルム・写真の中でまず「薩南十島調査」を選択したのは、上記のように重要な共同調査であること、また、資料が比較的まとまっており、特にフィルムが編集されて字幕解説もついていたことなどの理由による。

また本共同研究でもうひとつ注目したのは、1937(昭和12)年に撮影された台湾南部の山地に居住する「パイワン族」に関する映像資料である。この映像資料は、少人数での調査によって撮影されたものでありながら、現地に精通していた鹿野忠雄を案内役として非常に貴重な動画、静止画の映像記録となっている。動画フィルムも字幕が付されて編集されており、本共同研究では、撮影当時に日本統治下におかれていた地域の映像資料として、資料化に向けて整理・調査に着手する対象とした。

上記の課題、方針と対象地域の絞り込みにもとづいて、本共同研究で行ってきた活動を以下では1. 調査、2. 研究会、3. 成果の3項目に整理し、それぞれ時系列順に示しておきたい。

1. 調査

(1)〈鹿児島県十島村立口之島小中学校、十島村役場における現地上映会と調査〉:2010年3月22-25日に島民約50名の参加を得て現地上映会を行った。中には、当時の写真に幼少期の本人が写っているという事例も見られた。また、島内で最古の方には、重点的な聞き取り調査を行ったほか、鹿児島市内の十島村役場では、村長ほかの方々からも映像に関する情報を寄せてもらった。なお、上映会に際しては、事前に口之島に関する『アチック写真 vol.2』の写真資料集を作成し、島民に配布してもらった上で調査にのぞんだほか、新たな上映会の様子もビデオカメラとICレコーダーで記録にとどめた。なお、以下の上映会でも同様の記録化を行った。

(2)〈台湾屏東県におけるパイワン族関連の現地上映会と調査〉:2010年12月26-29日に、映像が撮影された台湾屏東県泰武郷、瑪家郷、三地門郷でパイワン族の住民の方々に映像を見てもらい、聞き取り調査を行った。なおこの調査は、国際常民文化研究機構の「第二次大戦中および占領

期の民族学・文化人類学」や「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」といった他の共同研究班と合同で実施することができた。

(3) 〈鹿児島県十島村役場中之島出張所における現地上映会と調査〉：2011年3月18-21日に島民約70名の参加を得て現地上映会と調査を行った。上映に際しては、事前に中之島に関する『アチック写真 vol. 4』の写真資料集を作成し、島民に配布して調査にのぞんだ。

(4) 〈台湾屏東県におけるパイワン族関連の現地上映会と調査〉：2011年12月16-20日に約40名の参加を得て、台湾屏東県泰武郷でパイワン族の住民の方々に対する現地上映会と調査を行った。聞き取り調査には言語的な不自由もあったが、当時の映像には記録されていない狩猟の際の歌を披露してくれる人や、映像にある編み物の身体動作を再現してくれる人など、言語を越えた調査資料を得ることもできた。

(5) 〈鹿児島県十島村口之島並びに中之島における調査〉：2012年3月26-29日に、前2回の現地上映会を受けて、さらなる追加の聞き取り調査を行った。特に上映会で情報を寄せてくれた人々に重点的に聞き取りを行った。

(6) 〈国立民族学博物館収蔵庫における薩南十島調査関連収集品の調査〉：2011年7月16-17日、並びに2012年10月13-14日に薩南十島調査時の映像資料に記録されているモノと、現在、国立民族学博物館に所蔵されている当時の収集品の対応関係を調査した。

2. 研究会

(1) 〈第1回研究会(2009年10月10-11日)〉：共同研究の概要について、「アチックフィルム・写真」の現状について、今後の研究計画について等を議論した。

(2) 〈第2回研究会(2009年12月7日)〉：「渋沢篤二と渋沢敬三の映像からみえてくるもの」(原田健一)、「口之島の祭祀組織と島の自治会」(小島摩文)の発表に続いて、2010年3月の口之島調査について、今後の研究計画について等を議論した。

(3) 〈第3回研究会(2010年7月18日)〉：「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象—空間・建築物と人の関係、及び、口之島調査から」(清水郁郎)の発表を中心に、口之島調査関連の資料について等が議論された。

(4) 〈第4回研究会(2011年3月21日)〉：「日本常民文化研究所所蔵アチック写真から見る渋沢敬三の資料観」(小林光一郎)の発表を中心に議論が行われた。

(5) 〈第5回研究会(2011年7月16-17日)〉：「アチック十島調査に関わる民博の標本資料」(飯田卓)の発表を中心に、国立民族学博物館に所蔵されているアチック調査による収集品に関する議論が行われた。

(6) 〈第6回研究会(2012年3月29日)〉：中之島での上映会調査を受けて、中之島・口之島での調査報告、これまでの資料整理状況と今後の計画についてなどの議論が行われた。

(7) 〈第7回研究会(2012年10月13日)〉：『アチックフィルム・写真』共同研究での調査・資料整理—成果公開に向けて」(高城玲)、「アチックミュージアムの調査写真・フィルム—渋沢の視点・同人の視点」(羽毛田智幸)の発表を中心に議論が行われた。

(8) 〈第8回研究会(2013年2月10日)〉：「渋沢敬三の画像資料認識」(井上潤)の発表を中心に、成果刊行の予定について議論が行われた。

(9) 〈第9回研究会(2013年6月29日)〉：飯田卓、羽毛田智幸、小林光一郎による成果発表会の発表内容概要に関する報告を中心に議論が行われた。

3. 成果

個々の研究成果については個別の成果報告に譲り、ここでは共同研究班全体で取り組んだ成果の概要を示す。

(1) 〈合同成果発表会 (2012年9月15日)〉：機構共同研究「アジア祭祀芸能の比較研究」班と合同の公開成果発表会「海を越えての交流—民俗、祭祀、芸能の面から—」を開催し、高城玲と羽毛田智幸が台湾「パイワン族」の映像と「朝鮮多島海」の映像に関する報告を行った。

(2) 〈共同研究成果発表会 (2014年2月22日)〉：最終年度にあたり、「ビジュアル資料と洪沢敬三—アチックフィルム・写真からの展望—」と題する公開の成果発表会を開催した。現地上映会開催地や外部からのコメントを含めて個別の研究報告を行った。発表内容は以下の通りである。「方法としてのアチックフィルム・写真—ビジュアル資料と現地上映会」(高城玲)、「現地上映会開催地 (鹿児島県十島村) からのコメント」(日高松行：鹿児島県十島村立口之島小中学校元校長)、「現地上映会開催地 (台湾屏東県) からのコメント」(林志仁：台湾行政院原住民族委員会)、「アチックミュージアム後期における『十嶋鴻爪』『パイワン族の探訪記録』の問題と課題」(原田健一)、「洪沢敬三の画像・映像資料認識」(井上潤)、「アチックフィルムにみる民具」(小島摩文)、「十島村の居住空間の現在—口之島を中心に—」(清水郁郎)、「薩南十島調査とその後への影響」(羽毛田智幸)、「アチックミュージアムの研究における洪沢敬三のポジション—イトマン・出漁・移動を事例に—」(小林光一郎)、「コメント」(須藤功：民俗学写真家)。

(3) 〈『国際常民文化研究叢書8 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象 [資料編]』〉：本書は上述した2つの課題の中の第1の課題に対する成果であり、「薩南十島調査」に地域を限定しながら映像資料の整理とその文化資源化を行っている。中には、1. アチック写真叢書版本目録 (薩南十島調査関連)、2. 国立民族学博物館の標本資料との照合、3. アチックフィルム「十嶋鴻爪」の映像階層表、4. 撮影場所を推定した口之島、中之島地図という主に4つの資料を収録している。

なお、2014年度には、叢書の「論文編」として各個の研究論文を収録した成果を刊行する予定である。

以上、本共同研究の活動内容を概観した。特に今回の共同研究では時間的な制約の中で、対象資料と地域を戦略的に限定しながら研究を進めてきたが、日本常民文化研究所には他にも多くのアチックフィルム・写真が所蔵されている。それらの映像資料をいかに整理・調査していくかは今後に残された課題でもある。特に今回の現地上映会を中心とする資料整理・調査の方法が他のアチックフィルム・写真の文化資源化へのひとつの範例となっていけば、本共同研究の目的の一端は達成できたと言えるだろう。